

GOOD SMILE

特別号

ひがしんコミュニティ誌“グッドスマイル”
あたたかく——人へ・街へ

夢つらなる 長屋物語



夢がつらなる、新たな長屋文化



◆ 京島長屋文化連絡会会長

後藤大輝さん

暇と梅翁株式会社 代表取締役。すみだ向島EXPO実行委員会委員長。京島まちづくり協議会委員。東京都認定空き家コーディネーター。映画、建築、催事をはじめ文化芸術に関わる様々なプロジェクトの企画制作に従事。

東京都墨田区の京島。戦時中、奇跡的に戦火を免れたことから今も長屋が多く残り、情緒あふれる景観をつくりだしている。しかし、京島に一歩足を踏み入れると、新たな長屋文化が形成されることに気づく。長屋文化に新たな風を吹かせる京島長屋文化連絡会会長の後藤大輝さんに話を聞いた。

「人生がつながり、人生がみえる家々」

隣り合う、許し合う

後藤さんの呼びかけもあり、京島の魅力や可能性を感じた表現者やクリエイターなどさまざまな人が集まるよう。そして、長屋も生まれ変わることを活かしながら、戦後は床屋だった家屋が花屋に、蕎麦屋がギャラリーに生まれ変わり、シェアハウスなども誕生。三代続く歯医者や牛煮込みの老舗なども連なり、多様な魅力が重なりはじめている。

後藤さんが町を歩けば「ちょっといい?」「昨日さ」と行く先々で、ご近所話に花が咲く。「隣人同士の付き合いも町の魅力。我慢することもあります(笑)が、みんな穏やかにラクに暮らしているんですよ」。いがみ合うのではなく、許し合う。人と人が隣り合う隣人文化が、京島の新しい長屋文化の根底にある。

長屋とは、1つの建物の中に複数の住戸が造られた集合住宅のこと。隣の家と壁を共有する構造となっている。京成曳舟駅から歩いてすぐの京島には、多くの長屋が残る。映画制作をしていた後藤大輝さんがこの町を訪れたのは2008年頃。「映画づくりのための刺激にあふれていました。路地を歩くと、板金や木工、プレス加工などの町工場があり、働く職人さんの姿があり、個性的な家屋に惹かれましたね」。その後、後藤さんは京島に住みはじめ、アートイベントの開催や空き家の再生など、京島のまちづくりに携わるように。

「均一で画一とした家ではなく、この町の家々には一軒一軒に個性があります。家を見ると、どんな人が住んでいるのか、職業や趣味、その人の顔や人生が分かるんです。この町には“表現する文化”がある。その象徴が長屋なんですね」。

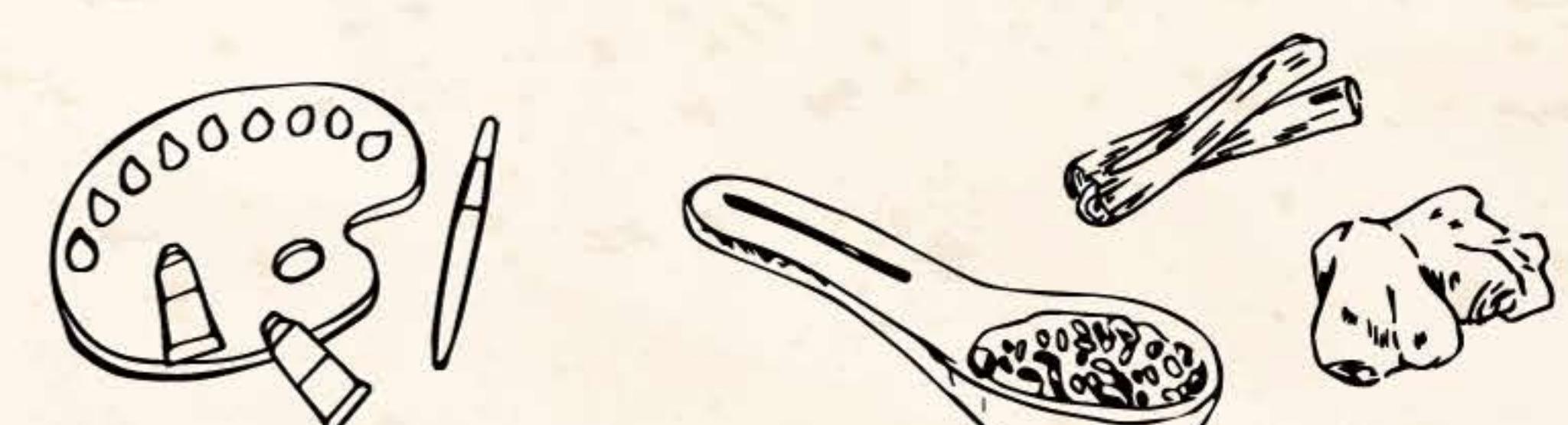


五感で楽しむ町の拠点

京島駅

古い家の主がいなくなれば、取り壊され、駐車場になることが多い。京島のある米屋もそうなりかけたという。しかし、後藤さんが掛け合い、今では地域の魅力を発信する拠点となっている。

墨田区京島3-50-12



手がけたのは、
想像の職人と絵師

元米屋の建物は、「京島駅」として生まれ変わった。全国の美術館や芸術祭を渡り歩くアーティスト＆ディレクターのヒロセガイさんが再生を手がけ、世代を問わずに多くの人が集まる駅のような場所を目指して名づけられた。「新しい古民家の再生方法を模索し、ここを賑やかな祭りが繰り広げられる神社にしようと思いました。想像の職人や架空の絵師がいて、その人たちが手がけたら、こうするんじゃないかとアイデアを膨らませて」。

水道の配管でつくられたアート作品や、架空の京島植物園、天井には巨大な蛸や海老の絵がうねる。3階の映像空間は、まさに異空間。世界的有名な映像アーティストさわひらきさんが手がけた映像が観る者に迫る。その想像力によって、約60年の古民家の建物内は、歩いたり、のぼったり、のぞいたりしながら五感で楽しむことができる。



アーティスト/ヒロセガイさん

スパイスレストランでは、本格的なカレーが味わえる



京島駅にあるスパイスレストランもヒロセガイさんの作品。江戸時代から続くネパール人のレストランをイメージしたという。

千葉大学原研究室と京島長屋文化連絡会の共催で行う「キラキラキッズクラブ」は、地域の子どもたちの実験の場でもあり、「すみだ向島EXPO」開催の際には、総合受付として地域の情報を探し、紹介する発信拠点にもなる。その随所には米屋であった名残も。

「古いモノと新しいモノ、この町は、さまざまな文化を受け入れてくれる大きさと深さがあるような気がします。まるで江戸のよう。全国各地から物資や文化が集まつた江戸の空気が息づいていて、住んでいる人たちも、『うちは元々、火消しで』とか、江戸の人たちと話しているような錯覚に陥りますよ(笑)」。

京島の町や人が、アーティストのイマジネーションを掲き立てている。



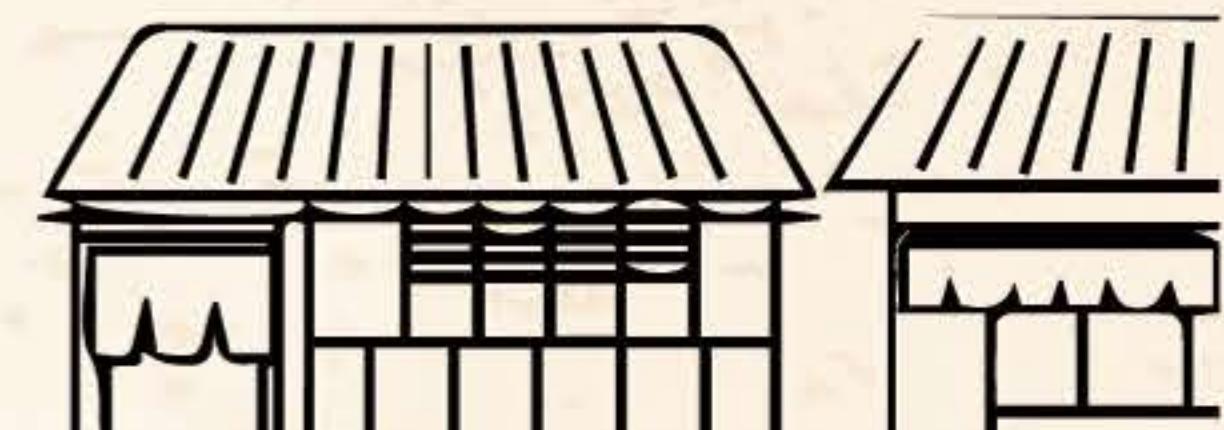
江戸時代から続く
スパイスレストラン!?



七軒長屋

約80年前に建てられた長屋は、個々の店主がリノベーションし、独特な魅力を醸し出している。

墨田区京島3-13-5



世界のボードゲームに 出逢える場

「MILLION PERCENT」は、オーナーの住中浩史さんがDIYして「ボードゲーム」を楽しむ場へと変貌させた。「自分たちの手でお店を形づくりるのは木造の魅力ですね」と住中さんは長屋の魅力を語り、ボードゲームの楽しさを話す。ボードゲームとは、一般的にサイコロやコマ、カードなどをつかって遊ぶアナログゲームのことと指し、店内には世界中のボードゲームが所狭しと並ぶ。

例えば、「ジャンクション」を英語や

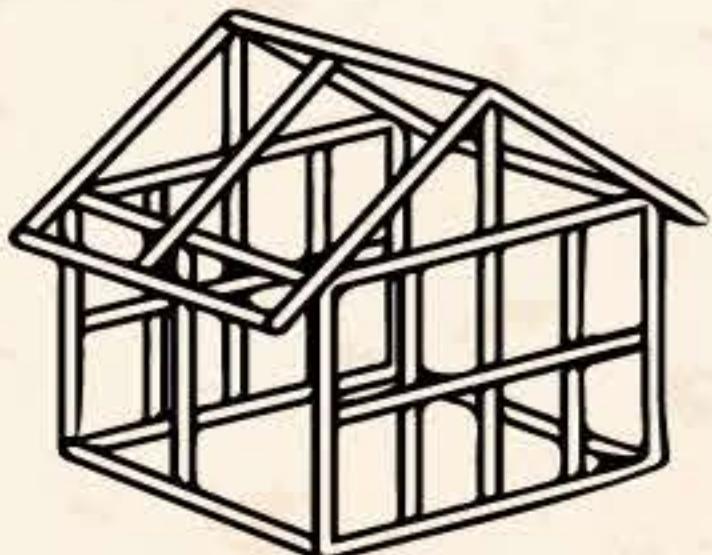
「UNTLED」にオフィスを構えるのが、メキシコ出身の建築家ラファエル・バルボアさん。「長屋2軒分を改修して、1つにしましたが、海外では例のない長屋の構造はとても面白いですね。特に、長屋の表と裏で異なる魅力があります。路面の入口から入って、一転して裏庭には静かな空間が広がっています」。

パブリックと
プライベートの空間



UNTLED

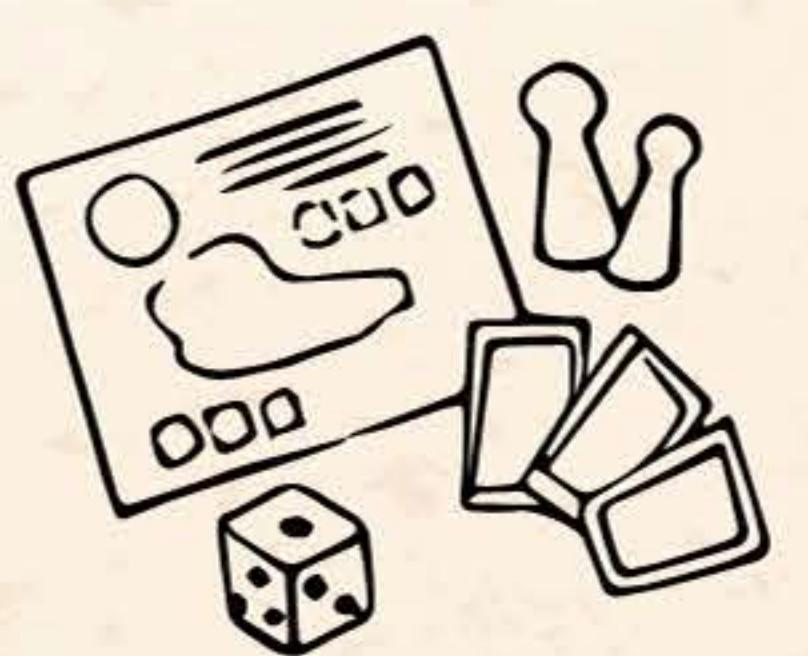
建築家/ラファエル・バルボアさん



アート作品が来る人を出迎え、卓球台が置かれたフリースペースもある。また、ベンチを置いて、地域の高齢者が腰を休めるようにする日もあるという。長屋建築に遊び心とデザイン性を加え、新たな文化を創造する。



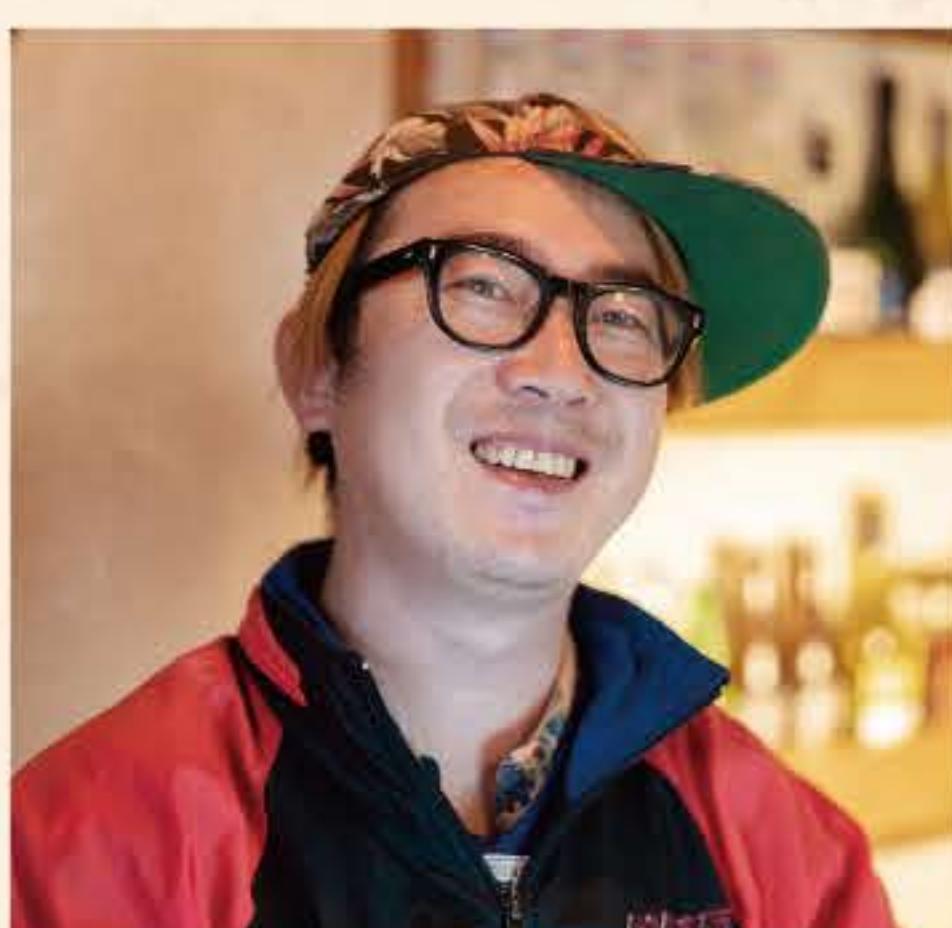
MILLION PERCENT
オーナー/住中浩史さん



カタカナを使わずに日本語だけで説明して、相手に当ててもうゲームは、単純だが意外と難しく、取材時は、単純だが意外と難しく、取材時も「え、交通が交差するところというか……」「何それ、もっとヒントちょっとだい」と大盛り上がり。「こんな風に、お一人様で来店しても、みんなでワイワイでき、新しい交流が生まれるんですね」と住中さんは笑顔で語る。笑い声に満ちる、手作りの空間が広がっている。

爬虫類館分館

墨田区京島3-17-7



シェアカフェ分館

総合マスター/樋口裕一さん



アペロワインショップ

ヴネ・クロエさん



その隣の「アペロワインショップ」は、青山でワインレストランを営むフランス人夫妻が、2号店としてオープンさせた。「古い長屋を新しく蘇らせる京島に共感して」とヴネ・クロエさんは、フランスを中心に家族経営の小さなワイナリーからオーガニックワインを直輸入し、造り手の支援も目指す。「ワインをあまり飲まなかつた地元の人々が、まず1本買って、『おいしかったよ』とリピーターになってくれることが一番うれしい。古い物や人とのつながりが残る京島の魅力も紹介したい」と、長屋からワイン文化を発信する。

店長さんが補充しておいてくれたり、忙しい時は手を貸してくれたり、近所で醤油を貸し借りするような文化が残っていますね。お互いのお客さんも紹介し合っています」と、ここにはより密な隣人文化が息づいている。

明治通りからキラキラ橋商店街に入る右角にある、通称「爬虫類館分館」という一軒長屋。実際に爬虫類はないが、約10人の店長が日替わりで運営するカメレオンのような「シェアカフェ分館」がある。同館の総合マスターである樋口裕一さんは、「オムライスや田舎寿司、タイ料理など店長ごとに異なる味が楽しめます。調味料や洗剤などが減るといつの間にか他の

醤油の貸し借り文化

立派な瓦屋根と江戸の出桁造りを継承する築約100年の長屋。その左端に、昼はサンドイッチカフェ、夜はおでんスタンドと2つの顔をもつお店がある。この空間をプロデュースするチームの代表で空間企画家の飯田拓哉さんは「代々商売してきた人たちの手垢が残っていて、一目惚れでした」と長屋との出会いを語る。設計デザインを手掛ける上野正明さんも「京島の

次の100年を一緒につくりたい

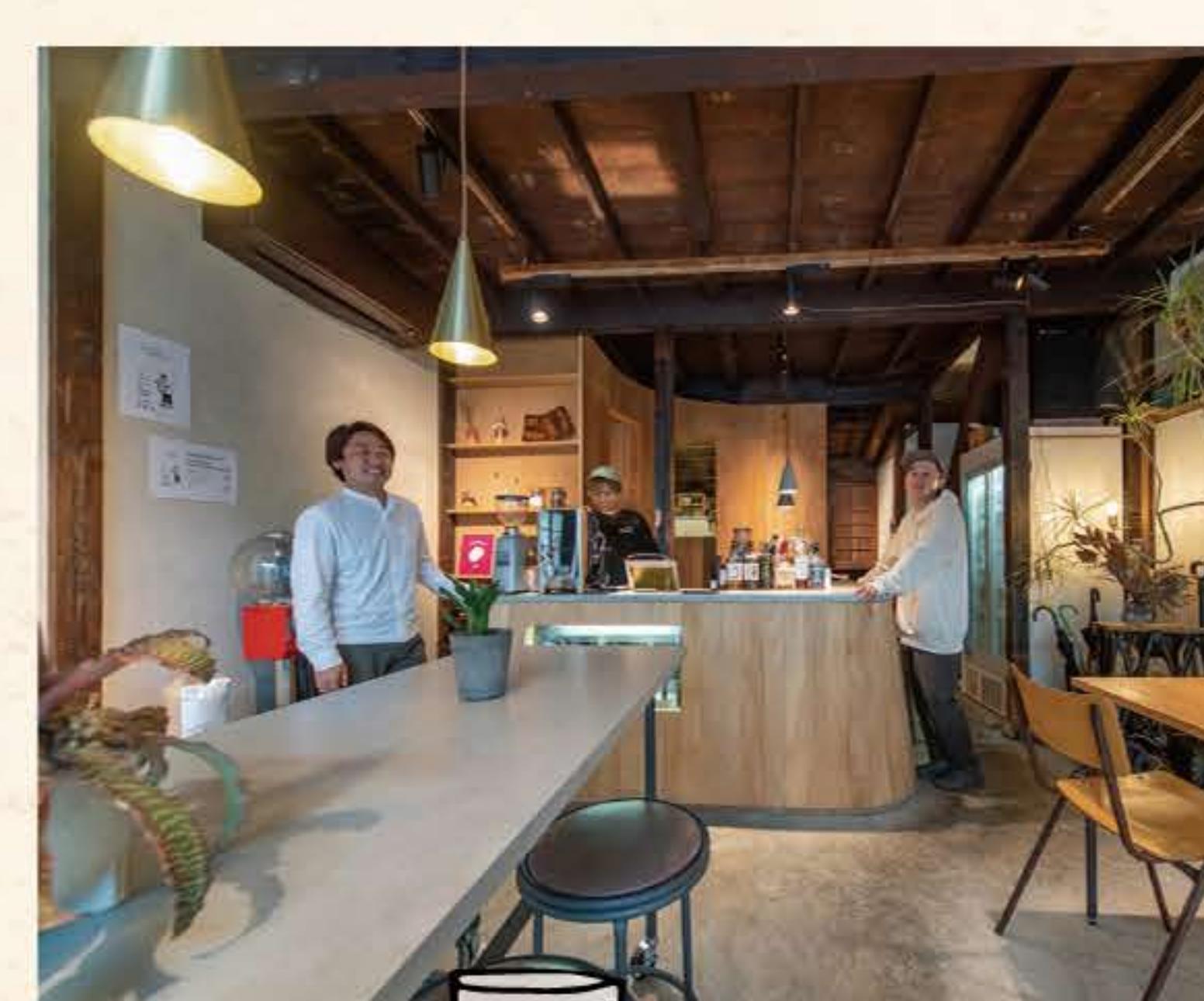
魅力は道端も家の中のような距離感。長屋は町民のアイコンであり共有資産」と話す。店長の福田愛子さんは常連客の声で生まれたサンドイッチを「中村さんと山ちゃんのリクエスト“なかやまサンド”です」と紹介する。夜な夜な進化し続ける新しい味のおでんも人気だ。

「今後はシェアスペースとして、趣味や夢を実験できるいろんな人の居場所にしていきたい。次の100年と一緒に作っていけたら」と飯田さん。チームの構想はさらに広がる。



六軒長屋

墨田区京島3-20-9



三-san / 十-ju

設計デザイン/上野正明さん
空間企画家/飯田拓哉さん
店長/福田愛子さん

京島地区から明治通りを渡った八
広側に連なるこの長屋、戦後の造りな
ので間口が広い。外からは見えないが
奥に平屋が繋がり中庭もある。2階は
シェアハウス、1階には町工場の次期
社長が夜だけ営業する食堂と、地元ク
リエイターや子どもたちのためのも
のづくりの拠点がある。2021年には花屋もオープン。WEBデザイナー

変化を繰り返し、咲く花



L'eau et le Soleil

三軒長屋旧邸 + 稽古場

墨田区八広2-45-9



文花会館

墨田区文花3-7-1



3つの時代が同居する長屋

大正末期の長屋建築。ここには、3つの時代が同居する。角地に面した正面には大正モダンの意匠が残り、左面は昭和時代に蕎麦屋として営業していたため、ショーケースが残る。右面には、平成になつて建築事務所と資材倉庫になつていた頃の名残も。今、この建物はアーティストたちの拠点になつている。

IIBスタジオ&市民ギャラリー

「IIBスタジオ&市民ギャラリー」は、現代アーティストの拠点になつていています。



IIBスタジオ&市民ギャラリー

現代アーティスト
三宅哲平さん/海野良太さん

アーティストの海野良太さんと三宅哲平さんのアトリエ兼ギャラリー。「大きな絵画を制作するので、天井をぶち抜いた長屋は便利ですね。作品の見え方も変わっていきます。あと、ねずみという小さな隣人もいるのも一つの魅力：か」と海野さん。苦笑する三宅さんはとともに精力的に作品制作を続けている場になっている。

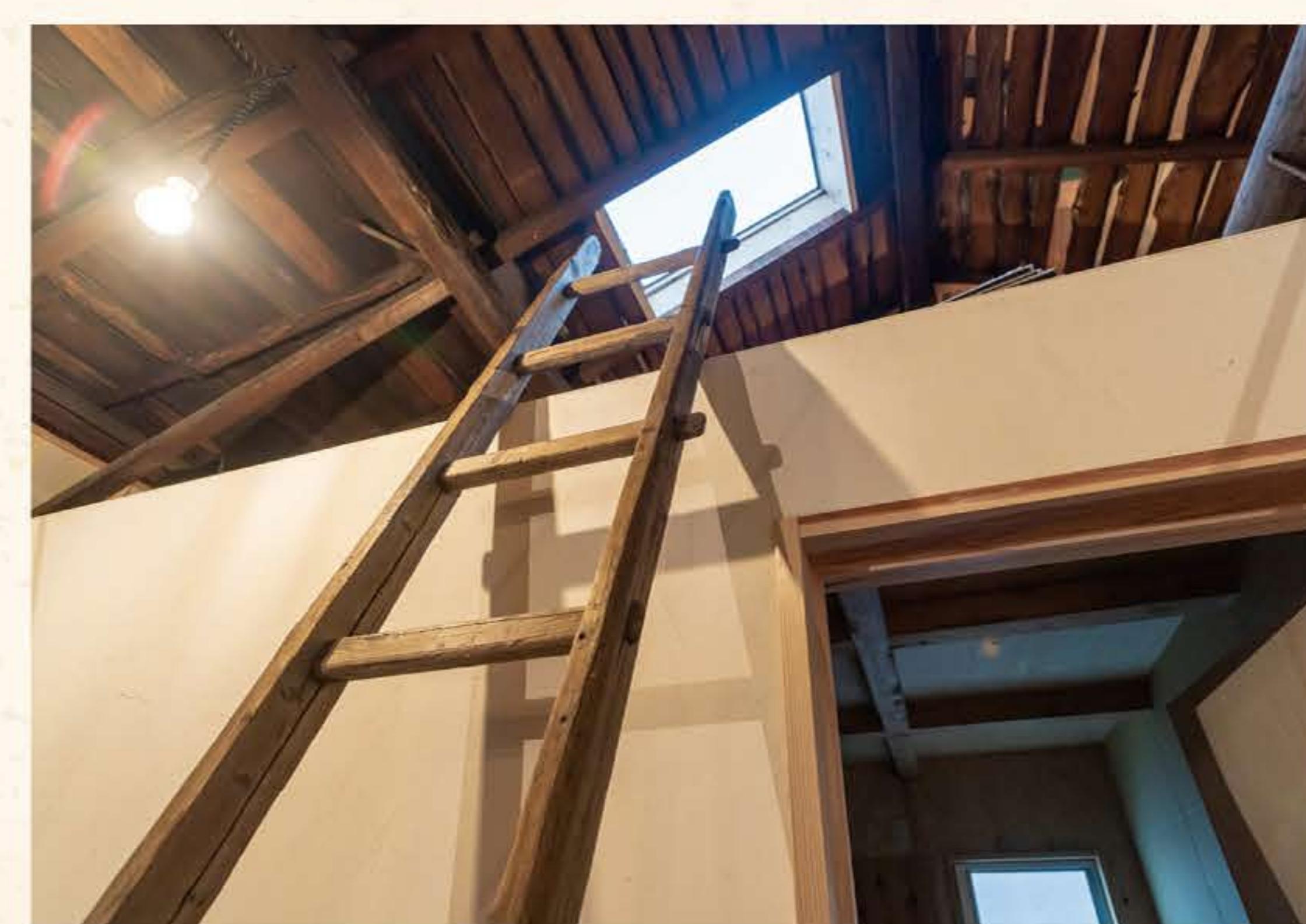
カソカソカソカソ…東武亀戸線の踏切に接する長屋。この長屋のリノベーションを担当するのが建築士の黒川陽介さん。「1階はカフェ、2階はシェアハウスとしてリノベーションしています。住む人にとって踏切はネガティブなイメージがありますが、ここはそれを楽しめるようにしたいと思い、2階の窓から踏切とスカイツリーを望めるようにしました。あと隅田川

京島で挑戦する地方創生



踏切長屋

墨田区文花3-2-1



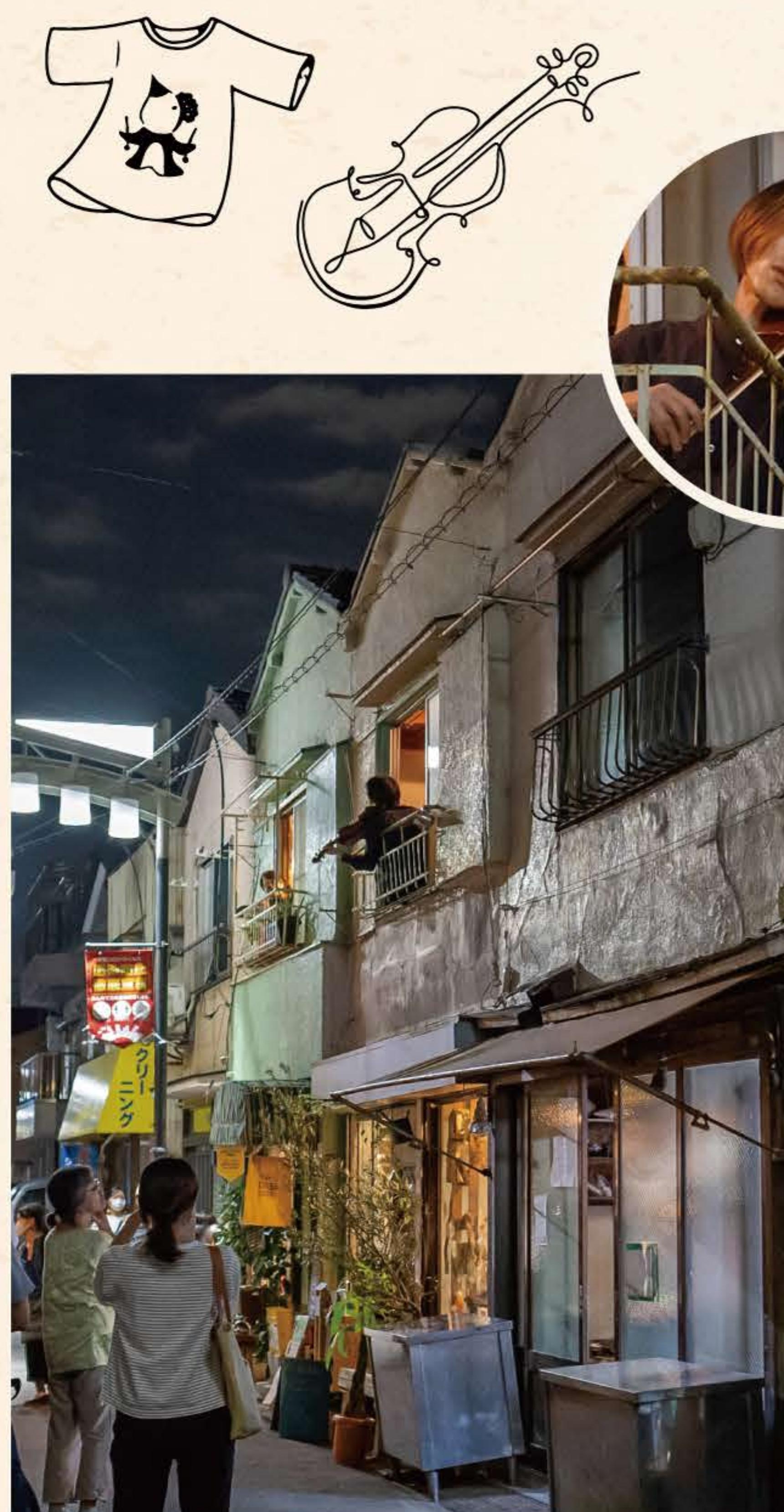
▲ OIDE STUDIO

建築士
黒川陽介さん

隅田川花火大会の特等席

三角長屋

墨田区京島3-48-3



夕刻のバイオリニスト

花火大会を楽しむためだけの窓もあります(笑)。また、入居者と一緒くつに京島の町に暮らして見つけた課題の解決を目指したいと語る。

実験的かつ挑戦的な取り組みの実現を目指す黒川さんは「家を設計するだけでなく、住む人の暮らしや人生の設計などいろいろなことに挑戦しています。住む人にとって踏切はネガティブなイメージがありますが、ここはそれを楽しめるようにしたいと思います。2階の窓から踏切とスカイツリーを望めるようにしました。あと隅田川



耳を澄ませば、
温かな旋律

レトロな三角屋根が特長の四軒長屋。キラキラ橋商店街の小道の一角で、昔ながらの商店とリノベーションされたお店が融合する。夕方になるとこの長屋から、バイオリンの音色が聞こえ始める。「サテライトキッチン」のオーナーがバイオリニストでミュージシャンであり、夕刻のバイオニーストとして地域で親しまれているのだ。

そのサテライトキッチンと中でつながる「ウイヴァネストペンギン」は、洋服のお直しやTシャツリメイクなどのお店。靴職人アトリエも連なる。そして、長屋が建った時から営業を続けるのが「ふくのや」。名物のやわらかな牛煮込みは、人気の味だ。そんなふくのやの女将さんも「素敵なバイオリンの演奏をいつも楽しみにしている」と話す。長屋から温かな旋律が生まれている。

— 長屋文化に出会える —
下町 MAP



 東京東信用金庫

 日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

●発行日／令和4年1月8日 ●発行／東京東信用金庫地域支援部 ●編集協力／(株)東京アドレップ (株)モスデザイン研究所
●写真／馬杉真理子 【お問合せ先】電話：03-5610-1129 メール：chiikishien-1190@higashin.co.jp